



# 辻斬り

11月16日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 11月16日のおはなし「辻斬り」

---

平次郎「旦那、聞きましたか。今月五件目でげすよ」

旦那「辻斬りか」

平次郎「はあ。それも何だか得体の知れない結社か何かの仕業だって噂で」

旦那「相変わらず耳が早いな」

平次郎「ところで今日はなんです、わざわざあっしを呼び出したりなんかして」

旦那「うむご苦労である」

平次郎「ご馳走でもくれるんすか」

旦那「ご馳走ではないが、茶菓くらいなら出そう」

平次郎「トカレフか何かで」

旦那「チャカとかハジキとか、そういうのではない。今日は一つ話しておきたいことがあるのだ」

平次郎「なんでげしよう」

旦那「お主は二十四節気というのを知っておるか」

平次郎「にじゅうしせっきとゆーの？」

旦那「知らぬのか」

平次郎「いやいや。知らぬってえますか」

旦那「では知っておるのか。二十四節気であるぞ」

平次郎「ええ。あの、あれで、ずいぶん古くから伝えられてるってえ」

旦那「ふんふん。よく承知しておるな」

平次郎「昔は石同士を、こう、ぶっつけて割ったものをナイフがわりに」

旦那「馬鹿者！ それは石器であろう。そうではない。わしは二十四節気と申しておる」

平次郎「アントニオ・タブッキならあっしにもわかるんですが、シセッキというのはどうにもこうにも」

旦那「何を言うておるか。それにシセッキではない。二十四節気だ」

平次郎「へえ」

旦那「春分はわかるだろう」

平次郎「へえへえ」

旦那「夏至、秋分、冬至もわかるだろう」

平次郎「へえへえへえ」

旦那「立春、立夏、立秋、立冬もわかるだろう」

平次郎「へえ、へえ、へえ、へえ」

旦那「そういうのが一年通して全部で二十四あって、これを二十四節気という。季節を細かく分けたものであるな」

平次郎「へえ。まだ八つしか出ていませんな。他にはどんなのがあるんでげしよう？」

旦那「それよ！」

平次郎「は？」

旦那「いや何でもなし。他にはそうだな、お主が知っていそうなものといえば啓蟄や小暑、大暑、小寒、大寒といったあたりかな」

平次郎「へえ。聞いたことがありますあ」

旦那「では七十二候は知っておるか」

平次郎「質が十二個、もう取り返せませんな。質流れですな」

旦那「質が十二個ではない。七十二候だ」

平次郎「あ！ あの、あれで。ほれ、巷では大層な人気だそうで」

旦那「適当なことを申すでない。先の二十四節気それぞれを初候、次候、末候の三つに分け、全部で七十二にしたものが即ち七十二候である」

平次郎「するってえと一年が七十二個に切り刻まれちまったてことでげすか」

旦那「よくわかったな。その通りだ」

平次郎「季節の辻斬りが出ましたかね」

旦那「馬鹿を言うでない。こうして一つの候がだいたい五日ばかりになる」

平次郎「なんだってまた、そんな細かく切り刻んじまったんでげしよう？」

旦那「むう。畑仕事にしても狩りにしても季節の細かい変化が目安になったからであろうな」  
平次郎「じゃあやっぱり立春、みたいな名前がついているんで」  
旦那「いかにも。例えば立春の初候は『東風解凍』などと申してな」  
平次郎「ははあ。豆腐をまちがえて冷凍庫に入れっちまったもので、あわててレンジでチンと」  
旦那「わけのわからぬことを口走るでない。東からの風がぶ厚い氷をとかし始めるということであるぞ」  
平次郎「なんだ。当たり前のこと言ってるなあ」  
旦那「たわけ！ そのように気候や動植物の変化を見事にとらえて季節を表しておるのだ」  
平次郎「それならあっしにだってできそう。『桜が咲き始めた』なんてのを思いつきませう」  
旦那「さよう。『桜始開』というのがちゃんとある」  
平次郎「先を越された」  
旦那「七十二候相手に張り合っただうする」  
平次郎「負けん気なもので」  
旦那「さてなぜわしがこのような話をするのかわかるか」  
平次郎「聞けばご馳走かなんか出るんですかね」  
旦那「そういうことではない。お主を見ていると『半夏生』という候を思い出すのだ」  
平次郎「いや、旦那。あっしのはおでこが広いだけで、こりゃあ何も薄くなったわけじゃあないんで」  
旦那「ハゲではない。ハンゲショウである」  
平次郎「丹下左膳のお友達かなんかで」  
旦那「半夏という薬草が生える頃という意味だそう」  
平次郎「ははあ。半夏が生えるで、半夏生。じゃ薄化粧ってのは薄毛が生えるってことで？」  
旦那「馬鹿を申すでない。ところがややこしいことに半夏生という植物もあるのだ」  
平次郎「半夏とは別に？ それも薬草なんで？」  
旦那「それが違うからややこしい。ちょうど半夏生の時期に花を咲かせるからその名が付いたと言われている」  
平次郎「そりゃまた紛らわしいことを」  
旦那「おまけにこの葉の表面が一部分は緑を残しながら白く変わってまるで半分だけ化粧したようになる」  
平次郎「半分化粧で半化粧。あっ」  
旦那「おまけに半夏生という候は、夏至から数えて十一日目、だいたい七月二日ごろなのだが、この数字、見覚えがあるう」  
平次郎「七と二、ややっ、七十二候の七と二！」  
旦那「いかさまさよう」  
平次郎「こいつああ全体どういうことでげしょう」  
旦那「さらにもう一つ。七月二日というのは、一年を三百六十五日とすると、百八十三日目、ちょうど半分、真ん中の日なのだ」  
平次郎「また半分が出てきた！ 何もかもまっぴたつだ！」  
旦那「いかにも」  
平次郎「え？ なんです。ダヴィンチ・コードでげすか、これは。バチカンの陰謀で？」  
旦那「お主は時々わからんことを申すな。どうだ、不思議であろう？」  
平次郎「一体全体何のまじないなんで？ それに、あっしを見ていると思いついてどういうことで」  
旦那「わからぬか」  
平次郎「あっ。あっしは、ななな何も知りませんぜ。そんな伊勢神宮の秘密も法隆寺の謎も、知ったこっちゃありませんぜ。そんな、何もかもまっぴたつに……。あ！ 旦那、あっしをどうしようってんで。まっまさか、だだ旦那が辻斬りの！」  
旦那「うろたえるな。そういうことではない」  
平次郎「では、なんでげしょう」  
旦那「その、『なんでげしょう』とお主が言うたびに、半夏生の不思議を思い出してしまうと言うことを話したかった」

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 辻斬り

<http://p.booklog.jp/book/39037>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39037>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39037>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.